

# 剰余享樂の二つの相

—ラカンの「資本主義の語り」をめぐって—

伊藤 正博

## 要旨

ジャック・ラカンが1960年代の終わりから取り組んだ「語り」の理論には、言語活動の領域と経済活動の領域との両者に通底するシニフィアン作用の働き方を明らかにするという狙いが含まれている。フロイト・マルクス間の架橋という主題との関連からも、ラカンが提起した「資本家/資本主義の語り」という着想のもつ理論的可能性は大きい。本稿では、広義の資本主義的生産関係が「大文字の他者」として象徴的次元で働き、経済活動の主体を動機づけるファンタズムを提供する機能を有することに注目し、それが産業資本家のもとにどのようなファンタズムをもたらすかを、産業資本家と「主人の語り」における主人、すなわち奴隷による労働生産物の直接的消費者との比較を通して考察した。産業資本家のもとには、最終的消費へと向かうファンタズムと、再生産の回路に入らない領域へ向かうファンタズム、およびその領域の産業化へと向かうファンタズムが生じる。これらの要因を考慮に入れることが「資本家/資本主義の語り」を解明する手がかりの一つとなるだろう。

## はじめに

言語活動と経済活動とは、わたしたちの日常的な社会生活の基軸をなす二種類の活動である。もちろん大抵の場合、経済活動は言語活動を伴ったり含んだりしている。わたしたちは言葉を交わしつつ買い物をする。けれども両者はその交換原理を異にしている。わたしが言葉を使ってもわたしの言葉が減るわけではないけれども、わたしがお金を使えばわたしの金は減る。だから言語活動と経済活動とは異なる水準で社会的な繋がりを形成する二つの活動として区別される。しかしその一方で、確かに両者は単なるアナロジーにとどまらない共通の特徴や機能を持っている。そこには社会的存在としての人間のあり方の基底をなす何か働いている。

1960年代の末から70年代のはじめにかけてジャック・ラカンは、「語り (discours)」という操作概念を練り上げることを通して、社会的紐帯の構成原理を明るみに出すという試みに

取り組んでいる。彼の試みは、言語活動と経済活動とに共通する原理を抽出することをその射程の内に含んでいる。その試みの始まりにあたる1968年のセミナーで、彼は、マルクスの「剰余価値 (Mehrwert, plus-value)」をもじった「剰余享樂 (plus-de-jouir)」という用語を提示している<sup>(1)</sup>。資本主義的な経済活動の領域で剰余価値として見出されるものを言語活動の領域で対象aとして彼が見出したものに引き寄せて、経済活動に内在する「パロールなしの語り (discours sans parole)」を、つまり商品と貨幣とを交換するという行為をそれぞれ自体に暗黙の裡に含まれているシニフィアン作用 (signifiante) の次元を、捉えようという狙いがそこには込められている。

ラカンのこの試みは、フロイトとマルクスとをつなぐ橋を架けるという20世紀を通じて大きな課題であり続けた主題について、ついに彼がみずからの見解を語り出したという意味でも注目に値することだった。なぜなら、シュールリアリストたちからアルチュセール、さらにはドゥルーズとガタリに至るまで、フロイトの読

み方が変わり、マルクスの読み方が変わるたびにこの主題が変奏されてきた経緯を、ラカンははじめからずっと近くで見えてきたからだ。彼の「語らい」の理論は、そこにひとつの完結部を提供してくれるのではないかと期待された。

しかしその後「資本家/資本主義の語らい (discours capitaliste)」についての謎めいた図式を残してラカンは「ボロメオ結び」のほうに目を移し、その試みは中途半端に投げ出された格好になってしまった。ラカンの残したいくつかの断片的な説明を手がかりにして、近年、「資本主義の語らい」を、爛熟した消費社会が欲望の主体に及ぼす構造的危機を示すものとして解釈するいくつかの研究が現れている<sup>(2)</sup>。それらをラカンの試みの一側面に光を当てたものとして位置づけつつ、本稿では生産関係の側面に目を向けて、彼がどのような構想を持っていたのかということを含括的な観点から探してみたい。

## 1. 広義の資本主義的生産関係

資本主義的生産関係は、土地が私的所有の対象として商品化され、土地との繋がりを解かれた無産者が労働力商品というかたちで生産過程に組み込まれることによって成立する。これによって生産過程がその前後に存する流通過程に吸収・同化され、労働力の買い手である産業資本家の眼前に、一本の直線をなすように進行する商品売買の連鎖が現れる。同じことがどの商品の生産・流通過程についても言えるとすれば、多数の直線が交差する一つの平面がここに現れることになる。そこに次の事情が加わる。すなわち、いずれの商品もそれを繰り返し生産する活動から送り出され、供給されるものである。諸個人の消費生活を労働力の再生産とみなすならば、労働力商品もまた同様のフィードバック回路の内にあると考えられる。この事情を考慮に入れると、一つの商品の消費は他の商品の生産だということになり、結局、諸商品の再生産の回路が相互に結びついて、まるごと全体としての関係が関係それ自身を反復・再生産する大きな回路を形づくることになる。

労働力商品という最後の環が結ばれるとき、産業資本家の前にはこのレース編みのような景色が一挙に広がる。それは等価交換という普遍的法則の下に開示される一つの領域だ。

剰余労働-剰余価値という問題をひとまず置いて、商品の流通過程をもその内に含めた、関係自身を再生産するこの関係の総体を、以下では資本主義的生産関係と呼ぶことにしよう。資本主義的生産関係は、単純な論理的可能性としては、貨幣を媒介にして交換可能なものすべてを覆い尽くすところまで無際限に広がっていくことができる。そのかぎりでは、それはエネルギー保存則の下に物質とエネルギーとの交換関係が展開する物理学の領域と類比的である。ただし経済活動はどこまでも諸個人の営利活動に支えられて存立するものでしかない。そのかぎりでは経済活動は、諸個人のパロールに支えられて存立する言語活動と類比的である。とりわけ資本主義的生産関係は、ラカンの精神分析理論の立場から捉えた言語活動の領域と重なり合う諸特徴を持っている。もともと、精神分析理論や構造言語学のほうが経済学の諸概念を借用しつつ形成されたという歴史的な事情をかえりみれば、それらの領域を横断する共通の原理が、後から出発した諸学を通して純化されたかたちで抽出されてきたと言った方がよいだろう。

## 2. 大文字の他者としての資本主義的生産関係

資本主義的生産関係が言語活動の領域と同じロジックに即して存立するものであるならば、それはラカンの大文字の他者 (l'Autre) と呼ぶものと同様の仕方で、象徴的次元で機能するだろう。ラカンは大文字の他者のさまざまな現れ方について語っているが、ここでは言語活動の領域それ自体のもつ、主体をこの領域へと動員し、去勢の法に従わせて「話す主体 (sujet parlant)」へと仕立て上げる働きに焦点を合わせて考える。主体が言葉を口にするのは欲望に導かれてのことだが、その欲望は、そもそも大文字の他者によって呼び起こされ、方向づけられたものだ。大文字の他者は、主体に欲望を与え、かつ、それを満たさない、という仕方で主体の言語活動

を動機づけ、みずからの担い手となる「話す主体」へと仕立て上げる。一方、資本主義的生産関係もまた、欲望に導かれた諸主体の活動を通してみずからを維持・再生産している。言語活動の領域と同じように、資本主義的生産関係もまた、みずからの担い手となる諸主体をつくりだす仕組みを持っているとすれば、それはどのようなものだろうか。

ラカンは大文字の他者が「話す主体」をつくりだす仕組みを「欲望のグラフ」として図式化しているので、このグラフを手がかりにして考えよう。図1の中の大きく湾曲して右から左へ向かう馬蹄型の線は、言語活動によって欲動が方向づけられ、「話す主体」が構成される過程を表している。それと交差しつつ左から右へ向かう二本の横線の上段は言表行為を、下段は言表されたシニフィアンを連鎖を表す。

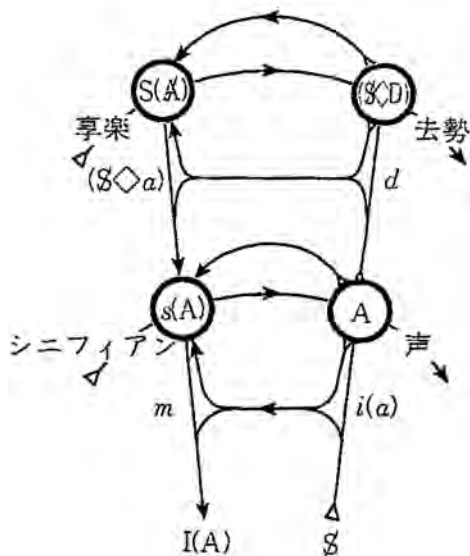


図1<sup>(3)</sup>

グラフの上段の言表行為の線、すなわち左端の原初的な享楽から右端の去勢に至る線が、「話す主体」が構成される道筋を示している。右下から馬蹄型の線に沿って上がってきた欲動の線は、まずS(D)の位置で左から右へ走る言表の線と交差し、つぎにS(A)の位置でも交差したのち、一部は下のI(A)に向かうが、一部は再びS(D)の方に向かっていく。

この後者の、上段を往復する格好になる過程を、「話す主体」ができあがる過程として、単純化して説明しよう。主体(S)は右下の大文字の他者(A)から投げかけられた「何が欲しいのか」という問いかけにうっかり乗せられて、次々と要求を重ねる(S(D))。しかし一つのシニフィアンから別のシニフィアンへとたらい回しされるばかりで、本当に欲しいものはそこにはないということ(S(A))に、主体は気づかされる。しかし時すでに遅く、もう後戻りはできない。主体は「言葉で要求せよ」という法(去勢)を受け入れるしかない。そこから「ああ昔はよかった」と過去(Jouissance 原初の享楽<sup>(4)</sup>)を懐かしむ嘆息と、シニフィアンの連鎖のすきまに垣間見えては逃げ去る享楽のなごり(a)へと向かうファンタスム<sup>(5)</sup>(S(a))とが生じる。主体はこのファンタスムに支えられて再びシニフィアンの連鎖を空しく辿り続ける(S(D))。以上のような過程がそれである。しかし右から左へ向かうこのような物語的な時系列は、「話す主体」から出発して週及的に再編成されたものでしかない。実際には欲望の主体は左から右へ向かうシニフィアン連鎖の効果として成立する。言語と出会う以前に「純粹」な欲動があったわけではないし、シニフィアンへと疎外される以前に何かしら「本来」の主体があったわけではない。欲望の主体は、要求の言葉が口から出て行ったあとで、あたかも出て行った言葉たちがそこに置き忘れたものであるかのように、無意識の内に生み落されているのだ。

言語活動の領域に見られるこのような事情は、資本主義的生産関係とその担い手となる諸主体との関係にも当てはまる。資本主義的生産関係の内では、主体は貨幣や商品へと疎外されている。そして、失われた昔の共同体への郷愁や、商品世界の彼岸にあるはずの対象への憧憬に導かれつつ、主体は空しく商品世界を渡り歩く。だが実は商品世界の彼岸への欲望は大文字の他者としての資本主義的生産関係によって用意周到に準備されたファンタスムに支えられている。実は、貨幣や商品へと「疎外」された状態こそが主体の本当の出発点をなしている。そして、あらかじめ方向付けられた欲望にそれと知らず導かれた諸主体の活動を通して資本主義的生産関係はみずからを維持・再生産する。



一見すると、ここに現れた見解は一般的な見解からかなり隔たっているように見える。一般には、資本主義経済の原動力をなしているのは致富欲であり利潤の追求であるとされている。しかし両者の事実認識に違いがあるわけではない。ここに現れた見解は、一般的な見解からさらに一步踏み込んで、富や利潤の追求がなぜ際限のないものになるのかという根拠に言及しているというだけのことだ。それよりも大きな問題提起をなしているのは、この見解の後半部分のほうだ。それは、マルクスの『資本論』をどのように読むかという問題に深く関わってくる。少し立ち入って説明しよう。

資本主義的生産関係にあつては人間の社会的関係が商品と商品との関係を仲立ちとして結ばれる結果、あたかも商品自体がその構成員をなす一つの社会的関係がそこにあるかのように見える。マルクスはこれを物神崇拜 (Fetischismus)、転倒した表象 (verkehrte Vorstellung) と呼ぶ。それらの表現は、あたかもそれを正して主体が本来の姿を取り戻せば問題は解決するといった印象を与える。しかし先に見たように「疎外」や「転倒」は、実は主体の出発点にほかならない。主体の「本来」のあり方と見えるものは、資本主義的生産関係によって与えられたファンタズムでしかない。資本主義的生産関係は、一旦成立すると大文字の他者として機能し、それ以前とは異なる神話的な時間軸の中にみずからを位置づける人間を「生産」し始める。それこそは『資本論』のマルクスが凝視していたことだった。

一般に「経済学批判要綱への序説」と呼ばれる1857年の草稿に、マルクスは「人間の解剖学の中にサル解剖学への一つの鍵がある」<sup>(6)</sup>と書き記している。これは、フロイトが神経症の症状形成のメカニズムとして発見した事後性 (Nachträglichkeit) と同様のメカニズムを、マルクスが歴史認識の領域で見出しつつあったことを示している。過去の体験の意味が遡及的に規定され、過去が現在から再編成される、あるいは場合によっては作り出される、という心的機制をフロイトは事後性と呼んだ。それと同様のメカニズムに即して歴史的過去も作り出される。そういう仕方では、つまり同時に過去を忘却し隠蔽するという仕方では、歴史は語られない、

ということマルクスは発見しつつあった。彼は以下のように続ける。

ブルジョア経済学の諸カテゴリーは他の社会諸形態を発展させたり、委縮させたり、戯画化したりなどしながら、それらを包含することができるが、つねに本質的な区別をおいてである。いわゆる歴史的発展というものは一般に次のことに基づいている。すなわち、最後の形態が過去の諸形態を自分自身にいたる諸段階とみなすということ、そしてこの最後の形態はまれにしか、しかもまったく限定された諸条件のもとでしか、自分自身を批判することができないので——ここではもちろん自分自身を崩壊期と考えるような歴史的時代のことを言っているのではない——つねに一面的に過去の諸形態を把握するということに基づいている。<sup>(7)</sup>

ここにはマルクスの自己批判が含まれている。労働の概念も所有の概念も資本主義的生産関係の内でのみ、その十全な意味をもつにすぎない。それらは「歴史的諸関係の産物」であり、そのかぎり「その完全妥当性をこの諸関係に対してだけ、この諸関係の内部でだけもつ」<sup>(8)</sup>。ブルジョア経済学は(そしてマルクス自身も) そのことを自覚せず、それらの概念を普遍的な概念と思い込んで過去に投げかけてきた。そのようなことをすると、たとえばロックの「自己の労働に基づく所有」のような空想的な過去が作り出される。なるほどマルクス自身はこのような考えをイデオロギーとして退け、共同体的所有の諸形態を提示した。しかし彼がそのイデオロギー批判の拠りどころとした所有の概念も労働の概念も、資本主義的生産関係の「産物」であるかぎり、結局は同じ病根を断ち切れていないとすれば、どうすればよいのか。誤認を含んだ概念を通して初めて見えてくる区別や連関もある、と聞き直るしかないのだろうか。そしてなによりも、疎外された状態から抜け出したいという主体の願いそれ自体が、資本主義的生産関係の維持・再生産の駆動軸として機能するように資本主義的生産関係自身によって備えられたものでしかないとなれば、どうすればよいのか。

か。この発見をマルクスがどの程度深刻に受け止めていたかは定かでない<sup>(9)</sup>。しかし少なくとも彼は、背後の扉が閉じられたことをこの時点で悟っていた。ラカンが「欲望のグラフ」を提示するのは、それから百年後のことである。そこにはマルクスが漠然と懸念したことが、あからさまなかたちで描かれている。経済活動の領域にあっても事情は変わらない。資本家であれ労働者であれ、同じ「去勢の法」に服する者は、また同じファンタスムによって方向付けられもしている。

### 3. 「主人の語らい」

言語活動の領域にも経済活動の領域にも、その担い手となる諸主体の活動を際限なく反復させる仕組みが組み込まれている。ではその仕組みのもとで諸主体は相互にどのような関係を織り成しているのか。ラカンの「語らい」の理論はそれを明るみに出すことを目指している。1969年のセミナーでラカンは、「主人の語らい」「ヒステリー者の語らい」「大学の語らい」「分析家の語らい」と彼が名付けた四種類の語らいの類型を提示し<sup>(10)</sup>、その後何年もかけて内容を充実させる試みに取り組んでいる。図2がその完成された形である。それは四つの位置と四つの要素との組み合わせから出来ている。

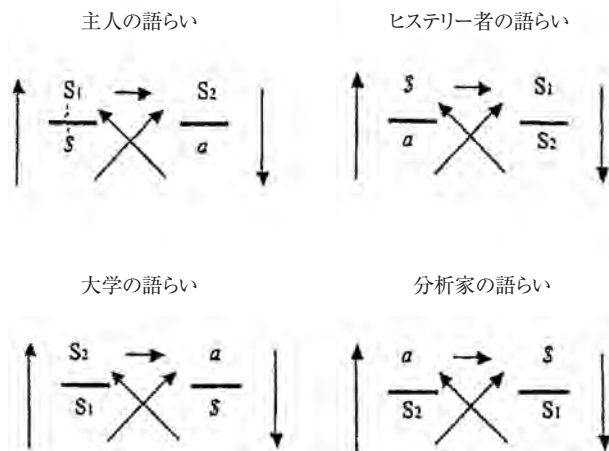


図2

四つの位置は、図3のように「能動者」「他者」「真理」「生産物」の位置であるとされる。後にラカンはそれらを「見せかけ」「享楽」「真理」「剰余享楽」と言い換えもしている。それぞれの位置をつなぐ矢印は影響関係を示している。

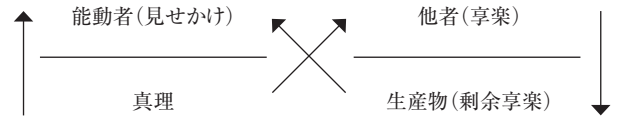


図3

「四つの語らい」の図式を見ると、「語らい」という用語でラカンが何を言おうとしているのかが、かなりはっきりと見えてくる。ここでは個人は四つの要素が置かれる「位置」に還元され、いわば「シニフィアン作用のアンサンブル」として捉えられている。そして左辺と右辺とが非対称的であることが示すように、「語らい」は諸個人間に非対称的な関係を生じさせるような仕方ではかなされない。ラカンは一つの型の「語らい」が他の型の「語らい」を呼び起こすという連鎖関係をいくつか挙げて、四つの「語らい」が全体として循環の内にあることを示唆している。また、「語らい」の中ではシニフィアンは常に別の文脈の中へと取り込まれてしまう。図3の左下の項から右上の項への矢印は、「能動者」が他者に働きかけるとき、それと同時に、「能動者」自身には隠されている「真理」すなわち無意識が他者に働きかけるという事態を表している。その結果、同じシニフィアンが「他者」の位置では異なった意味作用を産み出し、「能動者」の言葉は思い通りには伝わらない。つまりその構造上、必然的に語らいは意味作用の横滑り(déravage)を含んでいる。また、図2のヒステリー者の語らいを見ると、「能動者」の位置に「s」が置かれている。ここには夢や身体的症状を象形文字になぞらえたフロイト以来の考えが表されており、その読解の試みまでも含めた一連の過程を「語らい」という一つの単位として、すなわち、その中で「語る主体」が規定されるために必要なひとつの全体として捉えるべきだという考

えが示されている。後で見る「資本家/資本主義の語らい」の場合も左上の項は「S」になっており、そのことは、非言語的な(しかし言語活動に規定された)主体のあり方がそこに置かれることを示している。このように、単純な図式にラカンはさまざまな理論的要請を上手に盛り込んでいる。しかしその一方でこの四つの図式には、位置や矢印の意味するところを四種の語らいすべてに一貫した仕方で説明するのが難しいところもある。おそらく語らいという概念を練り上げていく途上でラカンが作成した粗いデッサンのような役割をこの図式は担っていたと思われる。

ラカンは「資本主義の語らい」を「主人の語らい」が現代風に変化したものとして位置づけているので、ここでは議論の都合上、「主人の語らい」だけを取り上げる。ラカンは「主人の語らい」を説明するためにヘーゲルが『精神現象学』で描き出した「主-奴関係」を引き合いに出してくる。単純に対応させるならば、図2の「主人の語らい」の「能動者」の位置にある「S1」が主人の命令ないし要求、「他者」の位置にある「S2」が奴隷の労働、ということになる。しかし『精神現象学』では主人が奴隷の労働生産物をめでたく享受することになっているのに対して、ラカンの「主人の語らい」にあっては、主人は労働生産物を前にして「本当に欲しかったのはこれではない」という結果を確認しなければならない。シニフィアン作用の水準で捉えるかぎり、生産物の位置に現れるものは、奴隷の労働生産物それ自体には欠けている何か、労働生産物の現前を通してその欠如が見出されることになる何かである。実は、言葉を語る主体である以上、ヘーゲルの「主-奴関係」の主人も同様の事情を免れてはいない。主人が何を要求するにしても、そのために主人はまず「何が欲しいのか言葉で言え」という要求を受け入れなければならない。そしてこの要求に服するかぎり、欲望の対象はつねに取り逃がされる。なぜならそれは言葉を語る主体となることそれ自体によって失われるものだからだ。だから「主人の語らい」の図式では左下の「真理」の位置にある「S」と右下の「生産物」の位置にある「a」との間には矢印で結ばれる関係が成り立たない。「欲望のグラフ」で見たように、この対象はシニフィアンの連鎖のすきまに垣間見られ

るしかないものである。あえていえば、この対象は「すきま」でしかなく、主体はそれをファンタズムで埋めるしかない。「生産物」の位置が「剰余享楽」と言い換えられるのは、そういう事情からでもある。この造語には、「もはや享楽はない」という含みと「もっと享楽を」という含みとが同居している。

#### 4. 主人と産業資本家との比較

「主人の語らい」に見られる主人と奴隷の関係とはほぼ同じ事情が資本主義的生産関係のもとでも見出される。それは産業資本家と労働者との関係である。そこで「語らい」の水準で産業資本家を主人と比較して、両者のあいだにどこまで対応関係が認められるのか確かめよう。主人の命令ないし要求(S1)に相当するのは、労働力商品の購入すなわち労働契約であり、それを具現する投下資本としての貨幣である。奴隷の労働(S2)に相当するのは、購入された労働力商品の消費すなわち労働者による商品の生産過程である。主人と同様に、資本家もみずからは生産に携わることなく労働生産物を手に入れる。しかし主人がその直接の消費者であるのに対して、資本家は労働生産物をみずから消費することができない。資本家の目的は労働生産物を売って剰余価値を得ることにある。それゆえ資本家の場合、「主人の語らい」における「生産物」の位置に現れる「a」に対応するのは剰余価値だということになる。ここに両者の大きな違いがある。とはいえ、要求の結果として得られるものによっては満たされないという点では、資本家も主人と同様である。なぜなら剰余価値は、それが資本に転化されるべきものであるかぎり、資本家の手をすり抜けていくものでしかないからだ。経済活動の水準における享楽は消費である。生産の目的は最終的な消費にある。にもかかわらず資本主義的生産関係の内には同時に生産でもある消費しか存在しない。主人が虚しくシニフィアンの連鎖を辿るしかないのと同様に、資本家も貨幣と商品との際限のない交換を繰り返すしかない。そのかぎりでは主人と同様、資本家も享楽から切り離されたところにいる。それでは資本



家の経済活動の動機はどこにあるのか。これも「主人の語らい」の場合と同様に、ファンタズムに支えられた享楽への希求が「真理」の位置で、つまり隠されたところで働いているはずだ。すなわち、「主人の語らい」における「a」と同様、産業資本家のもとに現れる剰余価値は、そこを埋めるファンタズムを生じさせる「すきま」として機能しているのであって、産業資本家の活動を動機付けているのはそのファンタズムだということになる。それはどのようなものだろうか。興味深いことにラカンの近くにいた二人の同時代人が、すなわちジョルジュ・バタイユとピエール・クロソフスキーが、この問いに取り組んでいる。彼らの議論を手がかりにして、どのようなファンタズムが資本主義的生産関係の内働いているのかを探ってみよう。

#### a. バタイユ

ジョルジュ・バタイユの『呪われた部分』は、ファンタズムの経済学とでもいった趣きの書物である。バタイユによれば、経済活動の本質は太陽から与えられる過剰なエネルギーの蕩尽 (consumation) に存すると言われる。そのような経済は自然界の生命現象から人間社会の文化的現象まで幅広く見出される。ただ宗教改革から近代産業社会に至る時代の経済活動だけが、この本質を外れて経済的成長それ自体を目的化する。その結果、余剰エネルギーを蕩尽して社会的関係を初期状態に戻す仕組みを文化の内部に構築することができず、過剰生産に陥った末に戦争という制御不可能な事態を招くことになってしまう、と彼は言う。

このことを例証するためにバタイユは蕩尽や奢侈を誇示するいくつかの文化的事例を持ち出して、そこに含まれるロジックを分析するのだが、その書きぶりは、はからずも近代産業社会の中に生きる主体としての彼自身のファンタズムを浮かび上がらせるものになっている。たとえばアステカの供犠や北米先住民のボトラッチを描くその筆致からは断念した原初的・神話的な享楽への彼の憧憬が滲み出ている。また彼はゴシックの大聖堂の建設を蕩尽の例として取り上げているが、彼自身があとで指摘するように、その議論の立て方は「失われた内奥

性」へのロマン主義的な郷愁を基調としている。端的に言ってしまうと、バタイユは奢侈や蕩尽といった経済的諸カテゴリーを自然現象に投げかけて半ば擬人化し、一種の自然弁証法を作り上げたうえで、その延長線上に、贈与と返礼の文化における儀礼的行為や、彼岸へと現世を繋ごうとする営みである中世キリスト教の大聖堂建設などを置き入れている。それらはいずれも近代的人間の回顧的な眼差しの遠近法の内働で捉えられた表象である。蕩尽の文化についてのバタイユの議論は、再生産へと回付されない最終的な消費をめぐる近代的人間の内にどのようなファンタズムが形成されるかということの一つの典型的な実例を提供している。

一方、資本主義については、バタイユは次のような見解を示している。すなわち、資本主義を準備するのはカルヴィニズムである。カルヴィニズムは一切の享楽を宗教的彼岸に押しやっ、現世における勤勉と儉約の倫理の理念的根拠としてそれを機能させる。そのカルヴィニズムから精神性——「隠れたる神」への関係——が取り去られたところに近代産業の世界が現れる。近代産業の世界は「もの」が支配する世界であり、この世界を導くのは「純粋権力 (成長以外に目的を持たない成長) への意志」のみであって、その中で人間は惰眠をむさぼっている、と。

資本主義とは、ある意味で、「もの」への無制限な、ただし結果を顧慮せず、また遠くをまったく見越さない、一種の盲従であると言えるだろう。資本主義一般にとって、「もの」(生産物および生産行為)とは、清教徒の場合とは異なり、自らがそれになる、またならんと欲するところのものではない。資本家のなかにもものがあるとしても、資本家が「もの」であるとしても、それは悪魔が、取り憑かれた人間の気づかぬうちに魂を支配しているとか、取り憑かれた人間が自分では知らずに悪魔そのものになってしまうとかいったようなものである。<sup>(11)</sup>

バタイユは近代産業の成長を、世界大戦をその結末とするような自滅的な過程を突き進むものとみなしている。彼は、それ

が無秩序で無自覚的な活動であると述べるだけで、何がそれを駆り立てているのかということについて、それ以上分析を進めない。それでも彼は、剰余享樂を導くファンタスムのもう一つの側面を見事に描き出している。ただしそれが見出されるのは「成長の惰眠に陥らない者」のもとにあって、産業資本家のもとにはない。

こうしてブルジョア階級は混乱の世界を生み出した。その本質は「もの」である、しかしもはや人間の自己放棄は神を前にしておのれを虚しゅうする行為と結びつかないために、成長の惰眠に陥らない者はすべて彼岸の探究が放棄されるのを見て悩むのだ。にもかかわらず行き詰まりにはならなかった。総じて「もの」が優位に立ち、大衆の動きを支配するという、そうした事態のためにかえって、挫折したすべての夢が手の届くところに留まったのだ。生活(生活の全体的動き)はなるほどそれらの夢から乖離した。しかし途方に暮れた者たちにとってそれはいまもなお慰めとして役立っている。一種の混沌が始まったが、そこでは相反する方向において、一切が等しく可能になったのだ。社会の統一は支配的事業の確固たる重要性和成功によって維持されていた。かかる多義性の中では、過去の誘惑はその失効の後も生き延びることは容易だった。現実がおおっぴらに人間の尺度になればなるほど益々唾棄すべきものとなる世の中では、それら(過去の誘惑)が導入する矛盾は感じられなくなる。<sup>(12)</sup>

資本主義的生産関係という一つの象徴的次元が打ち立てられたために無意識へと落とされた過去の文化的諸事象が、この新しい象徴界——神なき世界——のもとにあって表象可能なものへと加工され、審美化されたかたちで回帰する。近代産業の世界への反動として登場するロマン主義的な風潮に代表されるこの「夢」ないし「症状」こそ、資本主義を次の展開へと導く鍵となるものなのだが、バタイユにはまだそれが見えていない。

## b. クロソウスキー

ピエール・クロソウスキーの『生きた貨幣』には、バタイユが「成長の惰眠に陥らない者の夢」としてわずかに記したファンタスムの領域が、資本主義的な産業化にとつての最前線をなす領域として主題化されている。

経済的諸規範もまた、最終的下部構造を形成するわけではなく、諸情動(affect)のひとつの副次的構造を形成するだけではなからうか。そして、もし最終的下部構造が存在するとしたら、それは諸情動(affect)、諸衝動(impulsion)の働きによって構成されているのではないか。もしそうであるならば、結局のところ、経済的諸規範は、諸芸術や、道徳的ないし宗教的な諸制度と同じ資格で、認識の諸形態と同じ資格で、衝動的な諸力の表現、表象の一つの様相であるということになる。<sup>(13)</sup>

クロソウスキーによれば、諸衝動の内のある部分は抑圧に服して欲求(besoin)-要求(demande)の系列に取り込まれ、個人の統一性(unité individuelle)を形成する力へと変換されると言われる。それがひいては「需要」として産業化の対象とされ、経済的な領域を形成することになる。その一方で他の部分は、再生産の回路に入らないため排除されたり周縁部に押しやられたりする。たとえば情欲(悦楽的な情動émotion voluptueuse)は本来、「種の生殖本能」に資するものとして個人の統一性に取り込まれ、他の部分は倒錯として排除される。しかしどちらの部分へと分かれたるにせよ、諸衝動は基本的に抑圧に抵抗し、これと闘っている。これが基本的な構図である。ところが今や、再生産の回路からはじきだされた倒錯や芸術の領域を資本は未開拓の領域とみなし、商品のかたちをとって流通させることができるものをこの領域から引き出そうとする。

情欲の対象は本来、反復不可能な一回的なもの、取り替えの利かない唯一無二のものである。それはいかなる量の



価値をも越えたものであって、だからこれまで産業化の対象とならなかった。しかし、サドがそうしているように、情欲それ自体をその対象よりも優位に立たせ、対象を、情動を引き起こす単なるきっかけ、口実へと貶めてしまうならば、使い捨てにする対象を大量に生産し、消費させるという仕方での問題を克服することができるだろう。一方、情欲のほうも一種の経済的構造をあらかじめ備えている。情欲は欲動の状態 (état pulsionnel) が提供する素材を用いてファンタズムを製造する。このファンタズムはそれ自体としては交換不可能だが、そこへの通路となるシミュラクルを表象・再現可能なものの次元に作ることでできる。それゆえ、情欲の領域の産業化の成否は、シミュラクルの商品化の可能性に、その「品質」のほどに懸かっているということになる。

しかし事はそれほど簡単ではない。産業の製造物は個人の統一性を前提とし、その統一性を維持・再生産することに役立つなければならない。一方、情欲を喚起するファンタズムは個人の統一性を脅かし、これを犠牲にすることを厭わない。そこから「汝を確立することなしに享楽せよ、さもなければ、享楽することなしにただ生き延びるためだけに汝を確立せよ」<sup>(14)</sup>というジレンマが生じる。クロソウスキーが注視するのは、個人が統一される以前の諸衝動や情動の世界と、個人の統一性を基本的要素として成り立つ産業世界とのあいだの、このせめぎ合いである。一方で「産業世界は倒錯的要素の露出も含めてあらゆる露出を搾取するところまで行く」。他方で、たとえばサディズムやマゾヒズムは、人間の尊厳を貶めて情欲を高めるための格好の手段として、売買という行為をその遊戯空間に取り入れる、つまり、そのようにして産業世界の裏をかき、貨幣や商品のほうを情欲に奉仕するものに変質させてしまう。

金に代えて情欲の対象である生きた人間を本位貨幣にすればよいという着想はここから生じてくる。クロソウスキーの言うように、経済活動がそもそも諸情動、諸衝動の文化的表現、表象の一つであるとすれば、なるほどそこには一理あるのかもしれない。彼が情欲と呼ぶものが、さきにわたしたちが見た、資本主義的生産関係の内に置かれた主体がもつ、商品世界

の外部へと向かう欲望と重なり合うものであることは、あらためて指摘するまでもないだろう。

簡単にまとめよう。バタイユは近代産業社会を物の支配する「混乱の世界」としてしか捉えていないけれども、その過去に向かって蕩尽、奢侈、その将来に向かって戦争といったふうに、この社会の外部へと彼自身のファンタズムを投げかけている。わたしたちはそれらを産業資本家のもとに取り入れて、最終的な消費=享楽をめぐるファンタズムの具体例、すなわち「語らい」の図式の「生産物/剰余享楽」の位置に現れるaを埋めに来るイメージとみなしてもよいだろう。ここまでは「主人の語らい」の主人と産業資本家とはきれいに対応している。

しかしクロソウスキーが論じている情欲は、単純に産業資本家のもものとみなすわけにはいかない。なるほど資本はこの領域に目を向けるけれども、それはこの領域を商品経済の内に取り込むという意図、ラカンが「欲望の搾取」と呼ぶ意図に基づいてのことだ。ところが情動は本質的に商品世界の外部へと向かう。だから、何であれそれが商品という形態をとるかぎり、それは情動にとって大切な何かを欠いたものでしかない。産業資本家はこの逆説に挑む者として、つまり資本の欲望を代表する者として、消費者に働きかける側に立っている。このような産業資本家のあり方は「主人の語らい」の図式の中に納まる場所を持たない。奴隷の労働生産物の直接的消費者である主人は、むしろ商品の消費者の側と類比的なあり方をしている。

バタイユの議論とクロソウスキーの議論との違いは何を物語るのだろうか。バタイユが『呪われた部分』を書いていた1940年代からクロソウスキーが『生きた貨幣』を書いた1970年までの間に生じた、産業資本の基本的な動向の変化だろうか。たしかにバタイユが資本主義の本質をもつばら成長のみを目指す悪魔的な意志としてしか捉えていないのは、二度目の大戦に向かって押し流されていく1930年代から40年代にかけてのヨーロッパの情勢を念頭に置いていたせいもあるだろう。だが、同じ時代にパリにいたヴァルター・ベンヤミンは、状況をもっと屈折したものとして捉えていた。彼は1935年に「人類

の自己疎外は、自身の絶滅を美的な享樂として体験できるほどまでになっている。ファシズムの推進する政治の耽美主義は、そういうところまで来ているのだ<sup>(15)</sup>と記している。資本主義的生産関係がその再生産の回路の外部に生じさせた「美的な享樂」という幻想領域が大衆の情欲を引き寄せる大きな力をもつものへと成長していること、そしてそれが最終的な消費の享樂へと向かう幻想と重ね合されるようにして政治的プロパガンダに利用されていることが、ここには指摘されている。つまり、資本主義の転機を促す状況はこの時点ですでに熟しているのだ。

## 5. むすびにかえて

商品世界の外に向かう主体の欲望は、そもそも資本主義的生産関係がみずから主体に与えたものだ。だから、みずからがその再生産の回路の外部へ放逐した諸領域をあとで回収するという欲望、すなわちそれらの放逐された領域へ向かう主体の欲望を需要へと汲み上げるという欲望は、当初から資本主義生産関係の内に含まれていたものだろう。そうだとすれば、第二次世界大戦後の大衆消費社会の出現は、資本主義的生産関係自身があらかじめ持っていた欲望が顕在化したという意味をもつ。1972年のミラノ講演で「資本主義/資本家の語らい」の図式を提示したときラカンが考えていたのは、この段階に達した資本主義である。

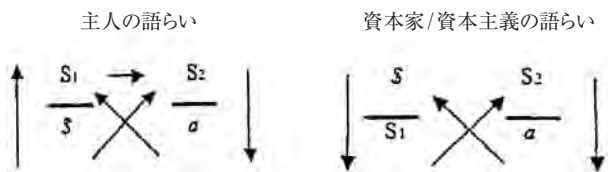


図4

「資本家/資本主義の語らいはこれです。S1と\$をちょっと逆転させるだけでよいのです。それでキャスター付きのように

うまく走ります。これ以上にうまくはできません。ただし、あまりにも速く走りすぎます。それは消費されます。消費された挙句、蕩尽されます<sup>(16)</sup>と、それが容易に理解できることであるのかのように軽い調子でラカンは言っている。しかしこの図式をどう読み解けばよいのか、今のところわたしには分からない。なるほど「能動者/見せかけ」の位置に消費者を当てはめるならば、クロウスキーの議論と滑らかにつながるような読み方が成り立つのかもしれない。実際、生産者であろうと消費者であろうと、主体は商品社会の外部に欲望を向けるよう方向付けられているのだから、それでよいのかもしれない。とはいえ、わざわざ「資本家の語らい」と読めるような名前をラカンがこの図式につけている以上、生産者の側を「能動者/見せかけ」の位置に置いた読み方ができるはずである。たとえば、情欲の領域の産業化を目指す資本の欲望と、商品世界の外部へ向かう一消費者としての情欲とがそこで交錯する産業資本家の無意識を「\$」とし、「S1」を商品広告としたらどうなるだろうか。その場合、パティユが示した最終的な消費のファンタスムは四本の矢印の形成する無限循環(∞)の果てに置かれ、現実界の露呈という皮肉なカタチで「実現」されることになるのだろうか。どこまでも問いは尽きないけれども、今回はここでひとまず筆をおくことにする。

註

- (1) Lacan, Jacques, *Le Séminaire, livre XVI : D'un Autre à l'autre*, Seuil, 2006. 13 novembre 1968.
- (2) たとえば松本卓哉『享樂社会論』人文書院2018など。
- (3) R. シェママ, B. ヴァンデルメルシュ編『精神分析事典』弘文堂2002による。
- (4) 原初的享樂は神経症者には神話的な幻想によって遮蔽されているが、精神病者には現実的な脅威として出現する。倒錯者の享樂、分析家の享樂など、享樂の諸相について、詳しくは、新宮一成「聖人=症候は享樂する—資本主義の語らいによるのとは別の仕方で—」iichico, No.141, 2019. pp.37-56. 参照。
- (5) ファンタスムは象徴的構造と具象的なイメージとを媒介する欲望の図式

として機能する。後出のクロソフスキーはこれを、ある特異的な体験として考えているようだが、本稿ではファンタズムという表記で統一した。

- (6) Marx, Karl, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, 1974. S.26. 邦訳は資本論草稿翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集1 1857-58年の経済学草稿I』によるが、一部変更した。
- (7) *ibid.*
- (8) *ibid.*
- (9) 青木孝平によれば『資本論』のマルクスもまた「資本主義的生産関係のイデオロギー的裏面にすぎない《自己の労働にもとづく所有》を、未来に実現すべき理想として対置する発想」に陥っていると言われる。『ポストマルクス主義の所有理論』社会評論社1992. p.109.
- (10) Lacan, Jacques, *Le Séminaire, livre XVII : L'envers de la psychanalyse*, Seuil, 1991. 11 février 1970.
- (11) Bataille, Georges, *La part maudite*, Minuit, 1967. p.172. 邦訳は生田耕作訳『呪われた部分』二見書房1973によるが、一部変更した。
- (12) Bataille, Georges, *op.cit.* p.174.
- (13) Klossowski, Pierre, *La monnaie vivante*, Editions Joëlle Losfeld, 1994. p.14. 邦訳は兼子正勝訳『生きた貨幣』によるが、一部変更した。
- (14) Klossowski, Pierre, *op.cit.* p.42.
- (15) Benjamin, Walter, *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*, Suhrkamp, 2019. S.77. クロソフスキーによる仏訳 *L'Œuvre d'art à l'époque de sa reproduction mécanisée*, in *Zeitschrift für Sozialforschung*, V.I, Alcan, 1936. がドイツ語版に先駆けてパリで出版されている。邦訳は野村修訳「複製技術時代における芸術作品」(『ボードレー爾他5篇 ベンヤミンの仕事2』岩波文庫1994所収)による。
- (16) Discours de Jacques Lacan à l'Université de Milan, le 12 mai 1972. In *Lacan in Italia 1953-1958*, ed G.B. Contri, La Salamandra, 1978. pp.32-55.



